

# 沿革編

## 上北鉱山の沿革

佐藤 宏司

上北鉱山は、青森県上北郡天間林村天間館（現・上北郡七戸町南天間館 1）に所在し、昭和 11 年 10 月 28 日に、「日本鉱業上北鉱山事務所（のちに上北鉱業所）」になった。

同鉱山は、大正の初年二、三の業者により探鉱が行われたが、本格的な開発は昭和 10 年三井栄一氏の所有になり、本坑硫化鉄床を発見したことに始まる。昭和 11 年 10 月、三井氏の委任により日本鉱業が経営に当たることになった。

その後、本坑に続いて立石、上の沢、奥の沢等で硫化鉄床を発見、本格操業に入った。

昭和 16 年、奥の沢硫化鉄床に接して高品位銅鉄床を発見し、19 年 9 月には月産銅量 1,400 トンを超え、当時本邦最大の銅山になり、「神風銅山」として全国に名を馳せた。

終戦後は、硫化鉄床の採掘を再開、23 年上の沢に、25 年立石にそれぞれ含銅硫化鉄床を発見して操業を継続、さらに、30 年代初めには奥の沢で露天掘りによるかつ鉄床を採掘し、青森へトラックで搬出した。

選鉱場で処理した精鉄は、鉄索で東北本線の野内貯鉄舎まで約 21 キロメートル搬送し、同所から貨車および貨物船で出荷していた。人員、重量諸物資は、東北本線乙供駅から約 28 キロメートルの軌道を、ガソリンカーで運搬していた。

昭和 30 年代初めには元山—青森間の道路が開通し、33 年 10 月路線バスが田代隧道口～青森駅間 1 日 2 往復で仮運行開始、34 年 7 月元山～田代～筒井～青森駅間 30 キロメートル 2 時間、1 日 3 便の運航が開始された。冬季には鉱山所有の雪上車も運行するようになった。

従業員数は、操業開始時はわずか 50 人だったが、昭和 20 年には 1,485 人、32 年約 1,000 人（同年の鉱山人口約 3,500 人）を数えた。その後は探鉱に努めたが新鉱床発見に至らず、46 年 9 月に坑内採掘を休止、48 年 5 月奥の沢の露天掘りも休止した。

操業開始から閉山までの粗鉱総生産量は約 506 万トン、精鉱中の銅量約 4 万 3,000 トン、亜鉛量約 2 万 3,000 トンであった。

（主に日本鉱業 50 年史・80 年史から）